

研究 成 果 報 告 書

(国立情報学研究所の民間助成研究成果概要データベース・登録原稿)

研究テーマ (和文)	国際的汎用性のある環境教育評価アプローチの開発: 日米の事例研究より		
研究テーマ (英文)	Developing environmental education evaluation methods that have international utility: Comparison of cases in Japan and the USA		
研究期間	2020 年 ~ 2022 年		研究機関名 立命館大学
研究代表者	氏名	(漢字)	桜井良
		(カタカナ)	サクライリョウ
		(英文)	Sakurai Ryo
	所属機関・職名		立命館大学政策科学部・准教授
共同研究者 (1名をこえる場合は、別紙追加用紙へ)	氏名	(漢字)	
		(カタカナ)	ステッドマン、リチャード、C
		(英文)	Stedman, Richard, C
	所属機関・職名		コーネル大学自然資源学部・教授

概要 (600字~800字程度にまとめてください。)

国際的汎用性のある環境教育評価アプローチの開発を目指した本研究では、国内の事例研究において海洋学習プログラムの効果を定性的・定量的に明らかにし、コーネル大学の研究者との国際共同研究ではアジアで行われてきた環境教育評価研究のスコーピングレビューを行った。まず国内の研究としては、瀬戸内海の沿岸域の中学校で行われている海洋学習プログラムの評価研究を継続して行い、三年間にわたるプログラムが中学生の海への態度や保全意欲に影響を与えることを意識調査及び描写された絵の分析より明らかにした。北米で研究の蓄積が進む社会心理学概念の一つである地域への愛着も用い、中学生が感じる地域や海への愛着が深まると、彼ら/彼女らの海の保全意欲が促進されることも明らかになった。この結果は論文として「保全生態学研究」(日本生態学会発行)に掲載され、また書籍『水辺で暮らす SDGs 第1巻「水辺を知る」』の一章として掲載された。

国際共同研究としては、コーネル大学に滞在しながら同大学自然資源・環境学部及びCivic Ecology labの研究者と日々打ち合わせをしながら新たな研究をスタートさせた。具体的には、アジアにおける環境教育評価研究の動向及び欧米の研究との違いを明らかにするために、日本ではまだあまりなじみのないスコーピングレビューによる研究の設計をした。現在はCivic Ecology Labの研究者及びコーネル大学Mann図書館の司書との共同研究として、日本及び中国の環境教育評価研究のレビューを続けている。

また本プロジェクトに関連する研究としては、環境教育の効果を人々の野生動物に対する意識から明らかにする国際共同研究を続け、その成果が本申請課題の共同研究者でもあるステッドマン氏及び上原氏との共著論文として国際誌Cogent Social Scienceに掲載され、また国際学会Pathway 2022: Human Dimensions of Wildlife Conferenceで研究発表をした。同様に市民科学に関する調査及び分析では、世界中の都市で行われている取り組みの環境教育の効果を比較した論文が国際誌Biodiversityに掲載された。

発表文献（この研究を発表した雑誌・図書について記入してください。）						
雑誌	論文課題	海洋学習が行われている中学校の生徒の海に対する態度と保全意欲：自由記述や絵の描写も含めた比較調査より				
	著者名	桜井良・上原拓郎・近藤賢・藤田孝志	雑誌名	保全生態学研究		
	ページ	181～195	発行年	2 0 2 2	巻号	27
図書	書名	水辺で暮らす SDGs 第1巻「水辺を知る」				
	著者名	桜井良（「第4章 1.2. 水辺における地域への愛着（sense of place）を育む教育」を執筆）				
	出版社	朝倉書店	発行年	2 0 2 3	総ページ	印刷中
図書	書名	知る・わかる・伝える SDGsⅢ 生産と消費・気候変動・海の豊かさ・陸の豊かさ・平和と公正				
	著者名	桜井良（「第3章 実践 豊かな海を守る人づくり - 岡山県日生町における中学校の海洋学習 -」を執筆）				
	出版社	学文社	発行年	2 0 2 2	総ページ	153

英文抄録（100語～200語程度にまとめてください。）

In this project; “Developing environmental education evaluation methods that have international utility: Comparison of cases in Japan and the USA”, firstly, a research on evaluation of marine education program was conducted. Continuous study conducted at one junior high school located in the coastal area of Seto Inland Sea revealed that students increased their sense of place towards and willingness to conserve the local sea through taking the marine education program which was mostly consisted of hands-on learning. These results were published as a peer-reviewed paper in Japanese Journal of Conservation Ecology. Secondly, a scoping review was designed and is currently conducted through collaboration with the researchers from the Civic Ecology Lab of Cornell University to understand the current situation and trends of environmental education evaluation research in Asia. In addition, as for the related research, a study on impacts of environmental education towards people’s perceptions of wildlife was conducted with co-researchers of this project; Dr. Stedman and Dr. Uehara. The results of this research was published as a peer-reviewed paper in Cogent Social Science, and were also presented in the international conference of Pathways 2022: Human Dimensions of Wildlife Conference.

研究代表者名 桜井良

共同研究者	氏名	(漢字)	上原拓郎
		(カタカナ)	ウエハラタクロウ
		(英文)	Uehara Takuro
	所属機関・職名		立命館大学政策科学部・教授
	氏名	(漢字)	
		(カタカナ)	
		(英文)	
	所属機関・職名		
	氏名	(漢字)	
		(カタカナ)	
		(英文)	
	所属機関・職名		
	氏名	(漢字)	
		(カタカナ)	
		(英文)	
	所属機関・職名		
	氏名	(漢字)	
		(カタカナ)	
		(英文)	
	所属機関・職名		
	氏名	(漢字)	
		(カタカナ)	
		(英文)	
	所属機関・職名		
氏名	(漢字)		
	(カタカナ)		
	(英文)		
所属機関・職名			
氏名	(漢字)		
	(カタカナ)		
	(英文)		
所属機関・職名			
氏名	(漢字)		
	(カタカナ)		
	(英文)		
所属機関・職名			